

健康寿命の延伸に向けた研究への取り組み



人間看護学部 人間看護学科

講師 岡崎 瑞生

研究分野 : 看護学、老年看護学、生活の質

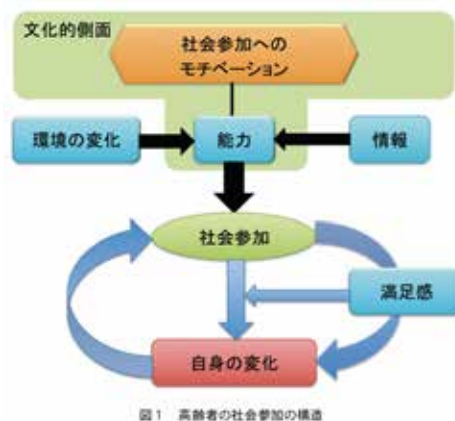
概要：生命・生活の質や対象者の思いに関する研究、高齢者や障害のある人々の支援につながる研究をしています。対象は、高齢者、障害のある人々、家族などです。

■高齢者の社会参加についての研究

前期高齢者の社会参加について、エスノメトロジー（民族看護学的研究方法）で調査した結果、大テーマ【高齢者自身が経験した事、興味があったことや元々仕事として行っていたことを生かして、ボランティアという形で活かすことにより、他人の役に立っている、楽しい、嬉しいというような気持ちが生まれ、それが自分自身の変化や生きがい、やりがいにつながっている】ことが導き出された。

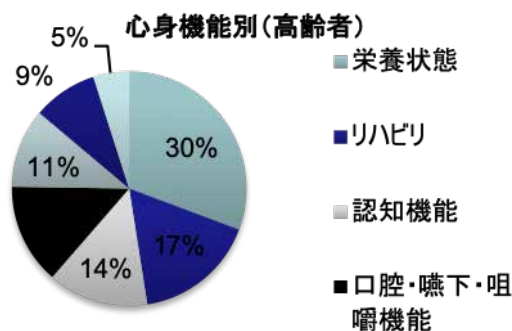
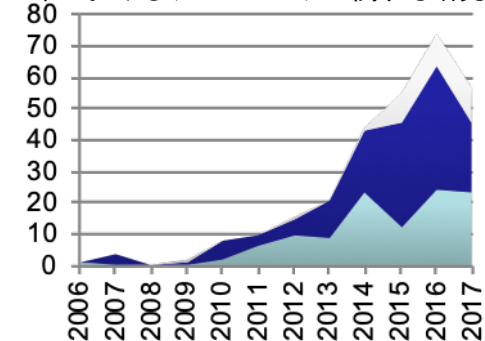
①社会参加へのモチベーションともともと持っている能力が社会参加への基盤となり、そこに個人の文化的側面に連動した環境の変化や情報などが加わることによって、社会参加が生じることが示唆された。

②いったん社会参加を体験した高齢者は自身の変化を体験し、満足感を得ることで、さらに社会参加をするという好循環に入ることが認められた。



■サルコペニア、フレイルについての研究

日本におけるサルコペニアに関する研究の動向（文献調査）



サルコペニアに関する研究は、近年【疾患別】よりも【心身機能別】が増加傾向にあることが分かった。介護予防に向けてADLの維持・向上のために、生活機能に焦点を当てた研究が増えていくことが期待されるが、「高齢者」で「運動療法・リハビリ」との関連についての検討が少ない点が課題と考えられた。

■エスノメトロジー（民族看護学的研究方法）を用いた研究

1型糖尿病患者の思春期における心理的体験について、エスノメトロジーを用いて研究した結果、思春期の1型糖尿病患者の体験世界を表す大テーマ「【分からない】事や【めんどくさい】事、【困る】事が多く混在し、【もうしょうがない】と考えないようにしたり、放っておいたり我慢したりしている中で、2型糖尿病とは違う事と経済的負担は【言いたい】事として発信している。」が明らかになり、実践への示唆として、混乱しがちな【分からない】事を整理し、知識に関する事について再確認の場を提供する、認知の発達段階を踏まえた指導・教育方法を用いて認知能力の変化する12歳前後に指導・教育方法を変えて再教育する、思いの表出の仕方を支援し、1型糖尿病について社会的理解を広める事の必要性が得られた。